

Los Angelesの子ティーンエイジャーとの比較を含む一考察

静岡大教育 大村知子

目的 わが国の小学生・高校生の衣生活意識とLos Angelesの子童・生徒の衣生活意識に関してはすでに報告をした。そこで今回は中学生を加えたティーンエイジャーの衣生活意識の把握を試みるとともに、自己の服装についての具体的な構想についての調査を試みた。本研究は服装の構想表現によって、衣生活意識と服装に関する認識の実態との関係を知り、国際化・個性化の時代の着行動や男女がともに学ぶ家庭科教育での衣生活領域のあり方などに対応するための基礎資料を得ることが目的である。

方法 資料は、1990年10月～1993年2月にかけて静岡県の中学生1710名、高校生1932名に対して実施した調査原票から、13歳～15歳までの男女各100名、16歳～18歳までの男女各100名計400名をランダムに抽出したものをを用いた。Los Angelesの資料は1990年と1993年調査の男子97名、女子155名 計252名である。調査内容は、着衣基体のガイドラインを示した質問紙への自分が好きな服装を描くもの、おしゃれのT.P.O.などに関する自由記述ならびに衣生活意識に関する4段階尺度により解答を得た質問20項目と基本属性である。服装画の分析にはさまざまな視点からみた特徴を33項目あげ、それぞれにカテゴリーを設定して解析を試みた。

結果 ティーンエイジャーが好きな服装を考える場合の大半が日常着であった。女子の下衣はスカートよりパンツが好まれ、日本では60%、米では85%がパンツを描きいずれもその傾向はローティーンに強かった。また、女子はハイティーンの方がローティーンよりディティールに多様なデザインがみられたのに対して、男子は加齢よる変化があまりなかった。衣生活意識と構想表現との関連性については、ハイティーンにおいて高い意識に対して構想が描けないなどのギャップが大であった。